

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02215

研究課題名(和文)高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」に関する研究

研究課題名(英文) Research on "to share the enjoyment" in Elderly People's Volunteer Activities

研究代表者

村社 卓 (Murakoso, Takashi)

岡山県立大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：80316124

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者によるボランティア活動の継続のために、住民ボランティアどうし、住民ボランティアと利用者がたのしさを共有することは重要な要因である。しかし、たのしさを共有することに集中しすぎると辛くなり活動の継続が困難になる場合が多い。たのしさを共有も集中から分散へと移行することでその継続が可能となる。本研究では、たのしさを共有にみられる「集中と分散」について明らかにしている。「集中と分散」に対するスタッフの支援について明らかにしている。集中しつつ分散することは活動を継続していくうえで重要である。集中は大切である。しかし、集中の持続は困難であるため、集中と同様に活動を分散することも大切な業務となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

たのしいと人は参加する。また、必要に応じてサービス利用につないでもらえるシステムは魅力的である。たのしいこととつながることは、高齢者の孤立予防を実現する推進力である。そして、高齢者のボランティア活動においてはたのしさを共有が重要になる。たのしさを共有は共感と支持から構成されている。また、たのしさを共有の継続は困難であるため、共有の継続には集中と分散が必要になる。本研究では、このことを長年に渡る大都市のコミュニティカフェの実践分析を通して実証的に明らかにしている。この成果は、新型コロナウイルス感染症拡大状況のなかで、さらに求められている高齢者の孤立予防対策にも、多くの示唆を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：In order to continue volunteer activities by the elderly, it is an important factor to "to share the enjoyment" of resident volunteers and users. However, if you concentrate too much on sharing the taste, it is often difficult to continue activities. "to share the enjoyment" can be continued by shifting from concentration to dispersion. This study clarifies the "concentration and dispersion" observed "to share the enjoyment", and the support of staff for "concentration and dispersion". Concentrating and dispersing is important for continuing activities. Concentration is important. However, as it is difficult to maintain concentration, it is also important to disperse activities as well as concentration.

研究分野：社会福祉学

キーワード：高齢者 孤立予防 ボランティア活動 たのしさ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高齢者の社会的孤立には、予防活動の現場において多くの住民ボランティアが関与している。その場合、活動継続のカギはメンバーや利用者との「楽しさの共有」にある。しかし、住民ボランティアのみによる「楽しさの共有」は困難であり、スタッフによる支援が必要となる。

たのしさとは快適な感情のことである。素朴でポジティブな感情である。そして、共有は共感と支持から構成されている。「楽しさ」を共有するうえで、「飲むこと」「食べること」「しゃべること」は重要な要因となる。言い換えれば、「一緒にたのしくお茶をすること」「一緒にたのしく食事をする事」である。この要因を取り入れた活動がコミュニティカフェである。倉持はコミュニティカフェについて、「飲食を共にすることを基本に、誰もがいつでも気軽に立ち寄り、自由に過ごすことができる場所」と定義している(倉持 2014)。

このように、飲食を共にする活動が「カフェ」である。本研究では、「カフェ」の参加者が飲食を共にすることに注目している。この要素を取り入れている高齢者の孤立予防を目的とした「カフェ」に注目するものである。

2. 研究の目的

本研究では、高齢者の孤立予防に関わる高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」の構造を明らかにする。日本において、大都市での高齢者の孤立予防に関わるボランティア活動(コミュニティカフェ等)を対象に、その定性的データの収集および分析により、活動における「楽しさの共有」について検討を行うものである。

これまでの研究により、高齢者の孤立予防を目的とした「カフェ」の特徴は、「たのしむ」と「つなぐ」であることが明らかにされている(村社 2020)。ここでは、「たのしむ」と「つなぐ」が共存しているところに特徴がある。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大により「カフェ」の開催は困難になっている。このような状況において、本研究では「たのしさの共有」の視点から高齢者の孤立予防に向けたボランティア活動の特性を明らかにするものである。「たのしさの共有」の視点から改めて「カフェ」の特性を明らかにする。

3. 研究の方法

高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」についての調査は、「カフェ」の中止前と「カフェ」の再開後に分けて行われた。

大都市 A 区 B 地区での参与観察は、中止前では、2019 年 7 月から 2020 年 2 月まで、調査者が単独で 6 回実施した(「カフェ 1」は 2 回、「カフェ 2」は 2 回、「カフェ 3」は 1 回、「カフェ 8」は 1 回)。調査者はスタッフとして参加した。主な観察項目は、「高齢者のボランティア活動における楽しさの共有とその支援」である。観察内容はフィールドノートに記録した。参与観察の主な対象者は「カフェ」の利用者、住民ボランティア、スタッフである。

大都市 A 区 B 地区でインタビューは、中止前では、これも 2019 年 7 月から 2020 年 2 月まで、「カフェ」関係者に実施した(回数 5 回、人数 6 名、時間 2 時間 10 分)。関係者の内訳は、「カフェ」のスタッフ、居宅介護支援事業所の職員、団地自治会の役員である(女性 5 名、男性 2 名)。内容は IC レコーダを用いて録音し「逐後記録」を作成した。

「カフェ」活動再開後の調査(2021 年 10 月から 2022 年 8 月まで)は、「新型コロナ感染拡大状況における変化」に関する調査(村社 2022)と内容が類似している。

このように、本研究における調査は、「カフェ」活動再開後の場合、「新型コロナ感染拡大状況における変化」の調査(村社 2022)と同時期に、平行して行われている。そのため、データ分析

には、上記の調査において収集したデータに基づいて作成されたフィールドノートや逐語記録を使用している。

しかし、同じフィールドノートと逐語記録を使用する場合でも、質問項目や観察項目は「高齢者のボランティア活動における楽しさの共有」についてであり、その視点から参与観察およびインタビューを行うことで収集したものである。

4. 研究成果

分析の結果、「楽しさの共有にみられる集中と分散」および「楽しさの共有にみられる集中と分散への支援」の内容が、定性的データでもって実証的に明らかにされた。ここでは、本研究の成果について説明を行うことにする。なお、本研究の成果の詳細については、『高齢者のボランティア活動とたのしみの共有』（村社 2023）を参照してほしい。

1) 楽しさの共有の構造

本研究における第1の成果は、高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」の構造について明らかにしたことである。

高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」の構造は、「楽しさの共有を目指した共感・支持の集中、見直し、分散」と表現することができる。

この定義の意味は、住民ボランティアが「自分でルールを決める」ことを通して、「本気になる」ことと「少しずつ続ける」ことをコントロールできることである。「楽しさの共有にみられる共感と支持」が「自分でルールをきめる」ことを中心に、集中するためには「本気になる」が、分散するためには「少しずつ続ける」が必要となる。

本研究では、活動の「見直し」だけでなく、さらに活動の「分散」を強調している。このことを踏まえて、本研究では、「楽しさの共有」には、「集中」の機会、「見直し」の機会、「分散」の機会がそれぞれ必要であることが示唆された。

2) 楽しさの共有への支援

本研究における第2の成果は、高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」への支援について明らかにしたことである。高齢者のボランティア活動に関わる支援者の役割について明らかにしているのである。

高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」への支援内容は、「楽しさの共有を目指した共感・支持の集中、見直し、分散への支援」と表現することができる。

「楽しさの共有にみられる共感と支持への支援内容」が「無理をさせない」ことを中心として、集中するためには「たのしんでもらう」ことを、分散するためには「長く関わってもらう」ことをそれぞれ意識した支援が行われる。

本研究によって、ボランティア活動の継続には、「楽しさの共有」について「集中する」ための支援、「見直しする」するための支援、そして「分散する」ための支援がそれぞれ必要となることが示唆された。

3) まとめ

本来、たのしいかどうかについては自己満足によるところが大きい。たのしさはその人にしかわからないからである。

しかし、自分のたのしさを相手に認めてもらえるというのも嬉しいものである。「楽しさの共有」である。高齢者の孤立予防を目的とした「カフェ」が続いているのも、活動がたのしいから

であり、それを一緒に共有できるからである。献身、義務、使命感だけで活動は続かない。「カフェ」では、楽しさを共有できるから活動が継続しているのである。

そして、「楽しさの共有」とは、言い換えるならば相手のたのしさに共感し、それを支持することである。

このように、「共感」とは「その通りだと感じる」ことであり、「支持」にはさらに「援助する」意味も含まれている。したがって、「共有」とは「一緒にその通りだと感じながら援助する」ことである。

一方、たのしさを感じるには、たのしいことに集中することも必要になる。「とても楽しい」という体験が必要なのである。

しかし、たのしいことだからといって、それに集中しすぎると疲れてしまう。いくらたのしくてもそれは長続きしないのである。集中はたのしむための重要な要素である。しかし、すべてではない。集中は疲れるからである。

そのため、たのしさを分散することが必要になる。「カフェ」の活動でも、分散して継続することが求められる。「カフェ」ではたのしいことも、コツコツと小出しにするのがよいのである。

毎回「カフェ」に参加して、自分のしたいことをコンスタントに少しずつ進める。目標はひとつに絞らない。リラックスしながら取り組むのがよい。必ずしも目標を達成しなくてもよい。「カフェ」では、住民ボランティアもコツコツと少しずついろいろやるのが大切なのである。

このように、高齢者のボランティア活動における「楽しさの共有」とは、たのしさに共感しそれを支持することあり、その継続には集中と分散が必要となるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 村社 卓	4. 巻 49(5)
2. 論文標題 コミュニティカフェによる社会的孤立と認知症の予防	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 651-655
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村社 卓	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 大都市における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性 - 利用要因および利用に伴う変化に焦点を当てて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会福祉学	6. 最初と最後の頁 32-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村社 卓	4. 巻 29
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染拡大状況における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山県立大学保健福祉学部紀要 = BULLETIN OF FACULTY OF HEALTH AND WELFARE SCIENCE, OKAYAMA PREFECTURAL UNIVERSITY	6. 最初と最後の頁 103 ~ 111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15009/00002445	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 村社 卓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 川島書店	5. 総ページ数 210
3. 書名 たのしくつながる高齢者の孤立予防モデル	

1. 著者名 村社 卓	4. 発行年 2023年
2. 出版社 川島書店	5. 総ページ数 240
3. 書名 高齢者のボランティア活動とたのしさの共有	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------